

## 横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の3項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1-C, B2, D2-U, B5-B, C4-D

〈知的発達〉					
E6	E5	E4	E3	E2	E1
D6	D5	D4	D3	D2	D1
C6	C5	C4	C3	C2	C1
B6	B5	B4	B3	B2	B1
A6	A5	A4	A3	A2	A1
戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可
(移動機能)					

簡単な計算可  
簡単な文字・数字の理解可  
簡単な色・数の理解可  
簡単な言語理解可  
言語理解不可

〈特記事項〉  
C: 有意な眼瞼運動なし  
B: 盲  
D: 難聴  
U: 両上肢機能全廃  
TLS: 完全閉じ込め状態

的外界は混沌としており、モノとして認識するのは、前述のヒトの顔のようなもの、赤い玉(新生児が追視しやすいとされている)ぐらいに限られてはいるはず(例・眼前にリングがあっても、それをモノとしての区別できない)。一方、新生児にとって聴覚的外界は、視覚的外界よりはるかにモノに満ちていると思えます(例・新生児は母の声を聞き分ける)。その後、外界を見聞きする経験を積み、さらに手で触ることを覚え、外界のモノを他者(ヒト)と共

有する経験を積み、健常者のモノの世界となっていく。なお、これらは非知覚的なモノ(概念の世界にもつながっていきます)。やはり、重症心身障害児にとっての外見のモノは、健常者のモノと同じであるはずはありませぬ。また、外界のモノとの経験は積んでいるので、その学習は脳障害のため制約があっても、新生児のモノ認識に留まっています。つまり、健常乳児にとっても、かなりやすい次のようなモノは、重症心身障害児でもモノとし

Aさん(横地分類A1)は、ベッド上での生活をしていきます。日中は、周りの音や環境を感じられるようベッドのヘッドボードを外して過ごしています。しかし、Aさんは、近くを通る職員を追視したり、そばに立った職員の顔をじつ

### あすかの 日常生活紹介 大野 やよい

ととらえ、その理解度を高めている可能性はあります。赤い色のもの、無地の背景にある縞模様、自然に動き始めたように見えるもの、手に取れるほどの距離にあるもの、手に取れるほどの大きさのもの、動きに伴って音の出るもの、あやすような人の声、触るとふわふわするものなどです。しかし、重症心身障害児には中枢性視覚障害が高率に合併するので、視覚的認識には相応な問題があり得ます。こうした問題を踏まえ、重症心身障害児の知育では、これらのモノを提示し、その理解を深め、それに対し探求する心を育てるべきと考えます。また、手が使える子には、手で操作する経験もしてもらいます。以上が現在の私たちの重症心身障害児知育に対する考えです。



と見ることはありません。職員と目が合う様子はなく、Aさんにとって職員の顔や周りの風景は、ぼんやりとしたものに見えているようです。そんなAさんに、見て楽しむ活動を提供しています。スケッチブックのページ毎に、色画用紙で○・△・□の形を貼ったものを使います。まずAさんにスケッチブックの小口の部分が見えるようにし、次に形が見えるように開きます。形が見える状態で5秒ほど置き、その後、小口の部分が見えるように閉じます。この流れで開くページを変えていきます。小口の部分が見えるようにスケッチブックを置いてAさんは、顔を小刻みに動かしていたり、眼球が動いていたり、そこを注目して見ることがありません。しかし、形が見えるようにページを開くと、顔の動きが止まり、はつとするように目を大きくして、

形のある部分に注目する様子があります。開いている間は、形のある部分に注目していて、ページを閉じると再び、眼球が動いたり、顔を動かしたりして注目がなくなります。白いページに濃い色で形を貼っており、この形だから、この色だからと注目度が異なるといえることはありませんが、ぼんやりとしている景色から、パッと色や形が現れるのを感じています。また、その色や形がなくなると注目がなくなることから、現れる・なくなるといった変化を感じとっているようです。音や言葉のリズムを楽しむ活動では、1音1音が繰り返されるリズムを集中して聞く様子があります。普段、職員同士がAさんのそばで話をしているとき、その会話に注目して聞いている様子はなく、また「Aさん おはようございます」と声を掛けても、こちらを意識する様子はあまりありません。しかし、活動でスリットドラムやキーボードの1つの音を「トン・トン・トン・トン」「ド・ド・ド・ド」と繰り返して鳴らすと、始めは、顔を小刻みに動かしていたりと、音に注目していないのですが、繰り返していくうちに、体の動きが止まり、音にじっと集中し